

＜今日の説教のポイント I コリント書7章1～16節＞

男女の性的な交わりについて聖書はどのように教えているか？

①「男は女に触れない方がよい」(1)、はパウロの言葉ではない！

パウロは、5章で放縱な生き方をする信仰者に対し、7章では禁欲主義的な生き方を主張する信仰者に対して答えています。ですから、ここ「男は女に触れない方がよい」(1)は、「わたしには、すべてのことがゆるされている」(6:12)と同様、パウロではなく相手の人たちが言っている言葉であることをまず理解する必要があります。パウロは性的禁欲主義が正しいなどとは決して主張していません。

②男女の性的交わりについてごく普通に話すパウロ。

その後パウロは、「しかし」(2)と言って、夫と妻の性的な交わり（「自分の体」(3,4)「相手を拒んではいけません」(5)）について続けて語っていきませんが、夫も妻も同じように相手の体を求め合うことを何の恥じらいもなくごく普通の話をするように語っています(3-4)。そこには、性交という行為自体を汚らわしい罪の行為と考える姿はどこにもありません。本来、男女の交わりは、子孫繁栄という神様の祝福の中に神様によって設けられた行為であり、その行為に喜びが伴っていても何の不思議もないのです。問題とすべきは、そのような神様のことを忘れ、相手のことも思わず、自分の満足を満たすためだけに行う場合です。それは、それを与えて下さった神様に二人が共に感謝し、相手のことを思いやりながら行うものとは全く違う行為です。神に背いたエバに訪れた苦しみの出産は、キリストの救いに与って神に立ち返って生き出す中で、再び喜びを伴う祝福へと変えられたのです（創世記3章16節は終わった！）。

③神様が人それぞれに与えて下さる賜物は異なり、皆素晴らしい！

パウロ自身は、「皆がわたしのように独りでいてほしい。しかし、人はそれぞれ神から賜物をいただいているのですから、人によって生き方が違います」(6-7)と語っています。不自然な禁欲主義も放縱な生き方もどちらも勧めないパウロ。なぜか？ 「神様から与えられるものは皆素晴らしい。そしてそれは皆に与えられている」、そう考えているのです。恵みの神様を信じて疑わない信仰者の姿です。